



全国シェア8割！ 蒲郡が支える日本の花火

能にしている。時報を合図に一齐に打ち上げを開始し、そのうち5回は同じタイミングで同じ花火を上げた。バラバラに上げるのではなく、市内一連として打ち上げることで一体感を演出したかったからだ。土地の形状も味方する。海に向かってなだらかな傾斜のある街だから、数力所の花火を同時に見ることが出来る。平坦な土地ではこうはいかない。竹島付近から見渡せば、大塚から西浦まで弧を描く海岸線沿いに花火が上がり、包まれているような感覚だったという。「あのクオリティで一齐に打ち上げることができたのは蒲郡だったから。」と加藤さんは話す。

市内にある企業、有限会社太田紙工と株式会社蒲郡玉皮は、どちらも花火を作る際に欠かせない半球状の「玉皮」という材料を生産している。聞きなれない玉皮だが、この2社だけで全国シェア8割を占める。つまり、日本で上がる花火のほとんどに蒲郡生まれの材料が使われている。2社が作る玉皮の見た目はあまり変わらないが、どちらも独自の工夫をし、お互いを尊重している。太田紙工・取締役の太田武明さんは「製造技術には自信があるけれ



江戸の花火を超えたい

花火の歴史を話す中で「江戸時代に発明されたカムロを令和の時代になっても超えられない。」という言葉が印象的だった。三尺玉で見られる、光の筋が柳のように尾をひく花火を冠菊かむぎくと言

ど、2尺の玉皮や多数の穴の開いた玉皮は蒲郡玉皮さんしか作れない。」と言う。蒲郡玉皮・取締役の大塚裕介さんは「花火師が命をかけて上げるものだから、均質なものを提供できるように力を入れている。」と話す。海外の花火には時々いびつなものがあるが、日本の花火は美しい円形に開く。これには玉皮の精度が大きな役割を果たしている。隠れたところで、がまごおりになるが日本全国の花火を支えている。



い、失敗した花火が元になってきたものだと言われている。海外でも「カムロ」と呼ばれる人気の花火だ。一方、加藤煙火が最も得意とする点滅花火にも失敗が活かされている。間違えてできてしまった試作品で、理想としていた瞬きに近い効果を得られた。そこから研究を重ねて「点滅2.0」という花火を開発することができた。最先端の点滅花火は、今年の蒲郡まつりの花火大会で披露される。江戸の花火を超えたいという心意気が、がまごおりになる花火を生み出す原動力になっている。

玉皮の新しい利用方法を模索しています

蒲郡玉皮：姫玉



太田紙工：玉皮おみくじ



花火は打ち上げるもの。運氣上昇の願いを込めています。

お祭りで手首にぶら下げてほしいです。

玉皮の中に玉皮を入れる

種類の違う星同士が混ざらないように玉皮の中にさらに玉皮を入れる。こうすることで開いた時に花火の色がくっきり分かれる。万が一の事故によるリスクを避けるため、花火師それぞれの作業場は小さく、2人程度で黙々と作業を進める。